

令和元年6月17日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02702

研究課題名(和文) 英国教材との比較分析によるグローバルリーダー育成のための英語教材・教授法開発

研究課題名(英文) Development of EFL Teaching Methods and Materials to Foster Global Leaders Through a Comparative Analysis with British Counterparts

研究代表者

森田 彰 (MORITA, Akira)

早稲田大学・商学大学院・教授

研究者番号：60210168

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、安定したコミュニケーション、問題解決能力を持ったグローバル・リーダーを育成する英語教材の開発にあった。その過程とし英国と日本の「発信系」教材の扱う話題を比較対象とし、社会的、文化的にグローバルな場面で深刻な衝突なく議論が可能となる話題と方策について分析を行った。英国においては、指導側ではなく、学生が自発的に話題を提案し、議論の中で共通の認識を得ていく手法が訓練されている。これらを踏まえ、成美堂、金星堂からプレゼンテーション教材を出版した。特に後者はアクティブラーニングの手法を取り入れた。また、議論に適した話題と語彙のリストについては、別研究費を獲得し、とりまとめに入っている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本で教育を受けた英語学習者は、グローバルな環境で積極的な発言や提示された話題や課題に対し、適切な受け答えができにくい実態がある。これは、言語面の英語力が不十分であるというよりも、主に文化・社会的背景に由来する話題に関する共有すべき知識の欠如、偏り等とともに、議論を始め、展開し、収束させるストラテジーに関する知識や訓練が足りないためと考えられる。こうした状況を克服するには、グローバルな環境、日本の英語学習環境にない、実際の環境にあって深刻な対立なく議論を進められる方策、表現方法を学ぶ教材を開発することは、日本の英語教育に authenticity を伴った新要素を加えることになる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop English language teaching materials, especially textbooks targeting students who want to be global leaders with robust communication and problem-solving abilities. Comparing Japanese textbooks dealing with productive ability in English with British counterparts, we analyzed what enables students to carry on discussions without serious conflicts. As a result, we found that British students are usually instructed to address subjects of discussion by themselves and to try to reach an agreement through the discussion itself. Based on the results of this analysis, we published two textbooks in 2018: Winning Presentations from Seibido Publishing Company and Active Presentations from Kinseido; the latter focuses on active learning. We are compiling lists of subjects and expressions, including words and phrases suitable for use in an earnest and meaningful but calm and peaceful discussion under another grant.

研究分野：英語教育、教材開発

キーワード：グローバル・リーダー育成 問題解決能力 議論の方策 グローバル人材 アクティブラーニング 英語によるプレゼンテーション EMI 教材開発

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本で教育を受けた英語学習者、あるいは英語話者は、グローバルな環境で積極的な発言や提示された話題 subject や課題 issue に対し、適切な受け答えができにくい実態がある。これは、単に文法知識、語彙の多寡といった言語面の英語力が不十分であるというよりも、主に文化的・社会的背景に由来する話題に関する共有すべき知識の欠如、あるいは偏り等とともに、議論を始め、展開し、収束させるストラテジーに関する知識や訓練が足りないのでは、との疑問を持つこととなった。また、ストラテジーとともに、一般的英語知識だけでなく、ストラテジーを円滑に実行するための語彙、表現に関する知識も必要であるとの認識を持った。

2. 研究の目的

上記の疑問と認識から、本研究の目的を、安定したコミュニケーション能力と問題解決能力を持ったグローバル・リーダー育成のための英語教材と教授法の開発とした。より具体的には、日本のグローバルリーダーの counterpart となる respectable native speakers らと議論を行う前段階として、話題の背景、社会的・文化的文脈を理解し、同じルールで日本人高校生・大学生が文章を書き、プレゼンテーションを行えるための指導法と教材開発に資する知見を得、教材作成を目的とした。

3. 研究の方法

以下により収集した情報、データ、知見をまとめ、まず発信を重視した英語総合教材を執筆し、次に、active learning の手法を取り入れた presentation 指導教材を作成した。
(1) 研究分担者、研究協力者によるウェブ、文献による先行研究の洗い出しと分析対象の検討 (2) 代表者の所属機関よりの助成金による本研究に資するプレゼンテーション語彙リスト作成 (3) 英国で使用されるプレゼンテーション (ディベートを含む) 教材の分析 (4) オクスフォード大学教育学部 the Centre for Research and Development on English Medium Instruction 上級研究員 Julie Dearden 氏 (2016 年まで在任、以後独立) との情報交換 (5) 英国における統一試験 (GCE A-Level) 上級の A2 の設問とその設問の出題意図、および試験結果等の分析 (2016 年度) (6) 中国科学技術大学凌震華副教授、同大学の spin-off 企業である iFLY TEK 胡郁副総裁らとの情報交換 (7) 日本で 2016、2017 年度に出版された大学生用英語教科書新刊の「表現系、議論系」の教材、課題 (タスク) の分析 (8) 中華人民共和国西安交通大学管理学院 (MBA) 王偉学院長他と英語によるプレゼンテーションに関する指導状況・教材等について情報交換 (9) 同国精華大学語音研究所黄偉明氏とプレゼンテーション用 ICT 機器とその使用法に関する情報を交換

4. 研究成果

(1) 英国における発信型言語教育の実態は、予想通りのものであった。つまり、secondary level に (11 歳から 16 歳) までは、一般的話題、また、日本での学齢と大差ない身近な話題をもって展開されていた。が、その後の大学進学準備段階 (sixth form) になると、大学入学統一試験 (A-Level) に向けた、academic なもの、また、global issues が取り上げられることが多くなる。これについても、日本の高校生が課されるいわゆる「小論文」とそれほどの差はない。が、現地での研究者との情報交換から、指導法の差が顕著であることが分かった。それは、英国の特に大学進学を目指す学生は、教科書等による「ひな型」の指導のあと、自ら話題や課題を発見し essay を書き、議論や essay に対する response を受けながらストラテジーを学習していく。これは、presentation 教材において、日本の教科書ではあまり扱われていない handling (dealing with) questions の手法、表現についてかなりの分量が割かれている場合が通例であることから分かる。こうした reasoning の手法は、Oxford, Cambridge 両大学の伝統的教育方法である tutorial system にも見られるものである。
(2) 上記および下記の研究分担者、研究協力者の関連分野の業績を踏まえ、まず、writing から presentation に結び付ける、構造と表現を重視した presentation 教材 *Winning Presentations* (成美堂) を研究分担者の原田らと執筆、出版した。この教材の特徴は、native による model presentation の動画を 20 以上伴っていることである。Model presentation の構造を分析し、構造の明確化し presentation を行う訓練ができるものとなっている。シラバスを含む指導法については、Teacher's Manual に詳述した。さらに、reasoning の基本はその根拠となる data の収集と整理にあるとの見地から、active learning の手法を導入した *Active Presentations* (金星堂) を出版した。Active learning の基本、調査の過程、情報の整理と発表の方策を学ぶため、ひな型となるチーム活動をなぞる形でそれを理解できるように工夫した。また、自らの課題を選び調査活動を実行する前に、調査・発表を実践できるよう、調査可能な課題 issue を複数用意し、その成果のモデルもシラバス、指導法と共に、TM に詳述した。両教材とも handling questions については、その重要性を TM に記したが、検討の結果教科書本体には表現のみに止めた。現在これを充実させた自学自習教材を他の出版社 (大学書林) から発行することになっている。
(3) 上記の教科書、TM 作成をより目的に適合したものとするため、各研究者は、以下に述べる関連の研究を行い、その成果を利用した。研究代表者は、まず発信を重視した総合教材、森田 彰 他、金星堂、*Target! Pre-intermediate*, 2016、ISBN978-4-7647-4017-4, C1082. 森

田 彰 他、金星堂、*Target! Intermediate*, 2017、ISBN978-4-7647-4035-8, C1082. 森田 彰
他、金星堂、*Target! Elementary*, 2017、ISBN978-4-7647-4034-1, C1082. を作成、出版した。
また、研究協力者は以下の関連研究を行った。 Masaaki Ogura, Investigating the Notion of
Slang in Lexicography, *International Journal of Slang Studies* 1(4)、査読有、2017、pp.79
- 87 小倉 雅明 他、Examining the Use of English Phrasal Verbs in Academic Spoken
Discourses : a Corpus-Based Study, International Conference of ESP-New Technologies and
Digital Learning, 2017 小倉 雅明 他、The Effectiveness of Multimodal Knowledge
Representation in Enhancing Metaphoric Competence in the Case of English Phrasal Verbs,
ASIACALL 2017 International Conference, 2017 青田 庄真、1970～1980年代日本の英語教
育言説にみる「コミュニケーション」、日本情報ディレクトリ学会 第21回全国大会、2017
青田 庄真、英語教育史研究におけるテキストマイニング：研究事例の紹介と今後の展望、日本
英語教育史学会第260回研究会、2016 Aota Shoma, Eikosha, *Collected Essays on
Comparative Studies: Bridges between Cultures (Quantitative Analysis of the Concept of
"Communication" in Japan's English Language Teaching Discourse during the 1970s and
1980s)*, 2018

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

原田 慎一、中華系シンガポール人大学生の言語態度、日本実用学会、査読あり、2018

〔学会発表〕(計 2 件)

青田 庄真、EFL Learners' Writing Processes with Machine Translation、54th RELC
International Conference (国際学会) 査読あり、2019

森田 彰、「学び」によって得られる報酬を明確にした教科書の開発、外国語教育メディア学
会第57回全国研究大会、査読あり、2017

〔図書〕(計 2 件)

森田 彰、原田 慎一 他、成美堂、動画で学ぶ英語プレゼンテーション *Winning
Presentations*, 2018、ISBN978-4-7919-3424-9, C1082.

森田 彰 他、金星堂、*Active Presentations*, 2018、ISBN978-4-7647-4057-0, C1082.

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

該当なし

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：原田 慎一

ローマ字氏名：Harada Shin'ich

所属研究機関名：立教女学院短期大学

部局名：現代コミュニケーション学科

職名：講師 (任期制)

研究者番号 (8 桁)：90598830

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：小倉 雅明

ローマ字氏名：Ogura Masaaki

研究協力者氏名：田中 (森谷) 祥子

ローマ字氏名：Tanaka (Moritani) Shoko

研究協力者氏名：青田 庄真

ローマ字氏名：Aota Shoma

研究協力者氏名：太原 達朗

ローマ字氏名：Tahara Tatsrou

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。